

## 鹿鳴館時代

西欧文明崇拜の聲は、ダンスの流行となり遂に明治十六年、鹿鳴館という「欧風の社交場」を、東京の日比谷に建築するに到った。

貴頭紳士は勿論のこと、貴婦人・淑女までも出入りし、盛んに欧化ぶりを發揮したという。

第一次伊藤内閣の頃は、その頂点で、毎夜ダンスや、オケストラの響に陶酔したもので、明治二十年四月に開催された「仮装舞踏会」の時は、総理大臣・伊藤博文が、ベニスの貴族に、また謹厳な・山縣有朋が兜を被った、武者姿で出場するなどの脱線振りに、満天下、騒然として非難の聲が上がったそうなの。

前年の明治十九年には「蓄音機」が渡来し、ゴム管を耳に挟んで聞いたという。また、和製の紙巻煙草が、ぼつぼつ作られるようになり、タバコの名前は「天狗煙草」であったそうなの。

明治二十二年には「憲法」が發布され、翌年には「帝国議会」が開会されるなど、内外ともに多端な時代でもあった。

